

国語総合

一般入学試験〈Ⅰ期〉・給費生入学試験

〔一〕次の文章を読んで後の間に答えなさい(ただし、文章は一部改変してあります)。

なぜ、東京デイズニールランドは爆発的人気を得て、商業的成功をおさめたのだろうか。その答については、開園以来、日本全国のレジャー業者やサービス業者をはじめ多くの経済評論家やジャーナリストが議論してきているが、関連するあらゆる指標や数字、市場調査を含む、より総合的な分析が必要と思われる。私はここでは、^①現在の日本の文化的状況と、デイズニールランドが一九五五年、カリフォルニアに初めて出現したころのアメリカのそれとの類似点だけを指摘しておきたい。

デイズニールランドのオープン直前に『デイヴィー・クロケット』というデイズニーのテレビ番組が空前のヒットを呼び、クロケット関連商品の大ブームを巻き起こしたが、これはアメリカにおける戦後のベビーブーム世代の文化的デビュールでもあった。それより以前、アメリカの子供たちは親から与えられたものを着たり食べたりするのが普通で、彼らの好みは市場に直接影響をおよぼすということは考えられなかった。(A)、この「ベビーブーマー」たちが経済的繁栄のなかで物ごころつき、テレビというニューメディアによって欲望を刺激されながら成長した結果、『デイヴィー・クロケット』というひとつの^②シヨクバイによって、まさに一夜にして^③子供市場が出現したのであった。クロケット帽やライフル銃が市場から消えると、今度はフラフープが登場し、子供や若者たちが商品の成功・不成功を左右する鍵を握ることとなった。

こうした新しい欲望の火つけ役であるテレビの画面では、『名犬ラッシー』『パパは何でも知っている』など子供中心のホームドラマ、バラエティショーと並び、^④クイズ番組が全盛をきわめた。一九五〇年代半ばのアメリカの青少年少女たちはクイズの断片的知識を吸収する一方、ホラー小説を読みふけり、脱色したジーンズをはき、ハンバーガーに飽きるとピザを食べた。町では各種のサービスが自動化されはじめ、冷凍食品が出まわった。大卒女性の就業率が急増したのも、このころである。人々が都市の住環境から大量に脱出するにつれ、郊外には大型ショッピングセンターやゴルフ場が増え、自家用車を主役とする郊外型中流階級の生活様式が確立した。政治の世界では冷戦の深刻化とともに、アメリカ人の国家意識・反共主義が高まった一方、ワシントンにおいては大統領の所属政党が議会の多数派政党と異なるという事態が百数年ぶりに生じた。

五〇年代のアメリカと八〇年代の日本とは重大な相違点もいくつもあるが、論点をはっきりさせるために以上のような側面を取りあげてみると、次のことがいえるだろう。(B)、経済的繁栄のなかで若者の好みは市場の傾向を動かし、豊かさというものを快適さで実感したい中産階級が台頭し、国民は国粋主義的傾向を強めながらも価値観の多様化を支持するといった状況が、デイズニールランドという文化産業の支持基盤なのである。ベビーブーム世代は、五〇年代の日本にも確かに存在したが、それは日本経済の高度成長期以前のことであり、市場を左右する力などトウテイ^⑤なかった。

その「団塊の世代」が生んだ次のベビーブームの若者が、今日の日本ではファッションからキャラクター商品、ビデオ産業から国内・海外レジャーまで、あらゆる分野に影響力をおよぼしている。テレビのクイズ番組全盛という五〇年代アメリカの事情も現在の日本と酷似しており、これは知識の断片化・視覚化に拍車をかけている。東京デイズニールランドがオープンしたところから、日本のブラウン管には、大規模な海外取材をもとにした新趣向のクイズ番組が続々と登場した。それは世界の風物に対する好奇心を反映はしているが、そうした知識欲は正解が示されたとたん、お馴染みの「ピンポーン」の音とともにどこかに消え去る。こうしたメディアの扱いを通して、地球や異文化は娯楽の対象、あるいはものの値段を当てて楽しむ消費の世界へと変容していった。

東京デイズニールランドという擬似アメリカ世界が東京^⑥ワンに出現したとき、日本の庶民の大半は、それを文化的キョウイ^⑦だとは感じなかった。それはむしろ、日本の経済力の象徴といったプラスのイメージで評価され、強い円が可能ならしめた「素晴らしい買物」という満足感すら、我々にもたらした。東京デイズニールランドの敷地の広さが本家のデイズニールランド以上だということを、日本人が強調したがるのも、そのあらわれである。

(C)、日本人は東京デイズニールランドの何を一番楽しんでるのか。オリエンタルランド社が東京デイズニールランド開園五周年の折に発行したパンフレットによると、ここが好きな理由として、多くの訪問客が「美しい」「広い」をまず挙げている。この回答は裏を返せば、日本の観光地がこれまでいかに「美しさ」と「広さ」と無縁であったかという事実を物語る。東京デイズニールランドのアトラクションがどんなストーリーを語り、何を伝えようとしているかといった内容よりも、まずは広い駐車場があって、美しく広大な環境で快適に遊べる空

間を日本人は潜在的に待ち^ナコがれていた。日本国民の経済力やレジャー時間にくらべて観光地の施設がどこも貧弱という、その空白のなかにドイツニーは第三の「魔法の王国」を運んできたのである。

(能登路雅子「ドイツニーランドという聖地」)

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A) から (C) に入る適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号は二回使用できないものとします。

ア たとえば イ さて ウ すなわち エ むしろ オ ところが

問三 傍線部①「現在の日本の……アメリカのそれとの類似点」について、筆者は三つの点を挙げています。本文中の語句をもとにして、それぞれ三十五字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「子供市場」とは、どのような市場のことですか。本文から三十字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「クイズ番組が全盛をきわめた」について次の問に答えなさい。

1 これはどのような弊害をもたらしましたか。本文中から六字で抜き出しなさい。

2 これは一九八〇年代の日本においても見られました。当時、東京ドイツニーランドという擬似アメリカ世界が日本で受け入れられたこととどのような関連があると考えられますか。本文中の語句をもとにして五十文字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「豊かさというものを快適さで実感したい」について、このことを端的に例示した一文の最初の五字を抜き出しなさい。

問七 傍線部⑤「日本人は……一番楽しんでるのか」について、この答から東京ドイツニーランドが爆発的人気を得た理由を考察し、本文中の語句をもとにして五十文字以内で説明しなさい。

【二】次の文章を読んで後の問に答えなさい。

一九九九年の秋の終わりから、二〇〇〇年の春の初めまで、ベルリン自由大学で教えていました。その学生たちとのつきあいは、心に残っていますが、もうひとつ大切な経験をしたのです。ベルリンで仕事をしている日本人は数多く、家族でここに来ている場合——また、お父さんがドイツ人、お母さんが日本人という家庭もあります——子供たちは、ドイツ語で教育の行われるギムナジウムに行っている子供も、日本人学校に行っている子供もいます。

その両方の親たちが、子供らに日本語をしっかりと教える目的を立て、自分たちで運営の資金を出して、公立学校の休みの日の校舎を借りて、ベルリン日本語補習授業校という学校を作っていられます。その運営にたずさわっている父母の方と知り合って——とくにあるお母さんにはひとり暮らしの買物のことなどとても助けていただいたのですが——一度そこへ来て子供らに話をしないか、と誘われました。

じつは四年前に、アメリカのプリンストンでも同じ経験をして、私はひとつ「方法」をあみ出していました。子供たちにとって、ある日、よく知らない大人がやって来て「講演」をしてくれても、オモシロいはずがありません。また、話しに行く方でも、まったく知らない子供たちの前に立つのでは、なにを手がかりに話しているかわかりません。

そこで私は、話を聞いてくれるはずの子供たちに、前もって「作文」を書いてもらうことにしたのです。それに赤インクの万年筆で、文章の不正確なところを訂正したり、まちがってはいけないけれど、もっとスッキリした文章にできるころはそのようになおしたり、さらに、文章の順序を、なにがいちばん書きたいのか、よくわかるように組みかえたりします。こういうやり方を、日本語の古い言い方で、(A) といいますね。おなじことを、自分で自分の文章についてやる時——詩でも文章でも——推敲^{テウキョウ}というわけです。

しかし、私はこの二つの言葉をあまり使いません。他の人の文章でも、自分の文章についてやるようにみがきあげてゆく、しっかりとしたものに丹念に作りあげてゆく、ということ、私は英語のelaborationという言葉が好きです。

なぜかという、(A) だと、一段高いところに立って、先生が生徒の文章をなおしてやる、という感じがするし、推敲だと、これは私だけの感じ方かもしれないけれど、なんだか趣味的な気がします。それがエラボレーションだと、相手と同じ場所に立って、一緒に文章をみがき、相手と自分とを人間として少しづつでも高め

ていつている、その印象があるからです。

私はプリンストンでの経験を改良して、ベルリンでも同じことをやりました。ベルリンでは、作文の主題が、「ドイツ人と日本人の『ヒカク』^ウ」ということだったのと、それぞれなを書くかを先生と子供たちがよく話し合っていてくださったのと、子供の日本の学校での体験入学のこともよく生かして書いてあるので、オモシロい作品が集まりました。

先生と子供たちとの話し合いが重ねられていることは、すべての作文の書きだしが、よくまとまっていることであきらかです。また、自分の体験をよく考えてきている子供たちは、ドイツ人のことも日本人のことも、とても公平に観察しています。外国の都市で二つの言葉を使って生きている子供たちに独特な、言葉への敏感さもつたわってきます（この夏、お母さん方が集まって、私のエラボレーションを生かしながら、つまり、どこをどうなおしたかもわかる印刷のやり方で、きれいな作文集を作られました）。

また私は作文を書いてくれた子供たちの努力にこたえるために、自分の子供のころの思い出と、障害を持って生まれてきた、私の子供のことを書いて、みんなの前でそれを読みました。この会でのことを聞いたドイツのジャーナリストに頼まれて、その文章を、ドイツの子供らの質問に答える形式に書きなおして、南ドイツの新聞に発表もしました。まずベルリンで暮らす日本の子供らの作文をエラボレートする、ということにはじまって、若い人たち、それも子供といつていい人たちに向けて文章を書くという気持が、そのように高まってゆき、ひとつの実りをもたらしたのです。それはこの本の最初におさめました。

そして、私が日本に帰って来て、同じような文章を続けて書くように、^⑥あらためてはつきりしたものに気持ちを押し出してくれたのが、二〇〇〇年の夏、長野県の高原で指揮者の小澤征爾さんと何日も話し合った、ということ。小澤さんとの話の内容は、ある新聞にのりましたから、お父さんやお母さんでそれを読んでくださった方はあると思います。

これまで、私には夏であれ冬であれ、静かなホテルで家内や光とゆつくり過ごす、という経験はありませんでした。それが、夜の間は、^⑤暗い紫色の鉛筆のように細く巻き込んでいたキク科の草花が、シバフいちめん黄色く開いている朝に散歩し、昼は小澤さんと話して、夜になると小澤さんとアメリカの有名なカルテットの第一ヴァイオリンだった方が若い人たちに音楽を教える——弦楽四重奏や、チェロの協奏曲を指揮して、少しずつ演奏を作りあげてゆく——現場を見せてもらいました。

私が小澤さんの指揮による、若い演奏家たちの練習を聴き、また見[、]もして感動したのは、そこに（B）のすばらしい実例があるからでした。まだ少女のようなヴァイオリンの弾き手、ヴィオラやチェロの若者の弾き手たちと、四重奏の演奏としては、中断し、どのような音楽を作りたいのかを考え、そのためにどのように弾き、また仲間たちの音をどのように聴くかを、小澤さんが、本当によくわかる言葉と表情、身ぶりでみちびいてゆきます。生徒たちはしっかりした技術と練習の積み重ねでそれについてゆき——自分で作りだし——ついには、さつきより優れたものとなる音楽を仕上げてゆきます。

それを見守りながら、かつ音楽を楽しみながら、私にはこの若い人たちの人間そのもの、人生自体が（B）をひとつ達成する、その大切な時に立ち会っている、という思いもしたのでした。

私は、^④小澤さんが、自分の心臓の鼓動がとまった時、これらの若い人たちの胸に新しい命がやどって動き続けるようにと、それを心からねがって教えている、と思いました。

もう時間がない、^③□□□つまった気分なんだ、とも小澤さんはいいました。もともとヨーロッパの人間作り出した音楽を、日本人が世界的な水準で自分のものにしてしまい、ヨーロッパの人たちにも認めさせた、その最初のひとりが指揮者小澤征爾です。かれは、それを若い人たちにつないでゆきたいと思いついて、働いているのです。世界じゅうを充実した仕事をして飛びまわる、大変な生活のなかで、この高原に来て、心から楽しんで……

そして、私には日本にいるかぎり現場で教える機会はないのですが、これまで小説家として知ってきたことを、もつとひろげて、若い人たちにつたえたい、と思いはじめたのでした。

（大江健三郎『自分の木』の下で）

問一 傍線部ア、エの、漢字には読みを付け、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「大切な経験」とありますが、この経験は結果として筆者の内面にどのような変化をもたらしましたか。本文中の言葉をもとにして五十文字以内で答えなさい。

問三 （A）の中に入る漢字二字を答えなさい。

問四 傍線部②「他の人の文章でも……作りあげてゆく」とありますが、これを筆者は具体的にどのような行いましたか。それがわかる一文の最初の五字を抜き出さない。

問五 傍線部③「あらためて……押し出して」とありますが、具体的にどのようなことを言っているのですか。本文中の言葉をもとにして五十文字以内で答えなさい。

問六 傍線部④の比喩の種類を漢字二字で答えなさい。

問七 (B) の中に入る適当な語句を本文中から八字で抜き出さない。

問八 傍線部⑤「小澤さんが……教えている」とありますが、この様子が具体的に記された一文の最初の五字を抜き出さない。

問九 傍線部⑥は追いつめられて窮する様子を表す慣用句です。初めの三字をカタカナで答え、慣用句を完成させなさい。

【三】 次の1～5の小説は誰の作品ですか。後群の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------------------|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|
| 1 | 河童 ^{かっぱ} | 2 | 三四郎 | 3 | 暗夜行路 | 4 | たけくらべ | 5 | しろばんば |
| (ア) | 樋口二葉 | イ | 芥川龍之介 | ウ | 志賀直哉 | エ | 井上靖 | オ | 夏目漱石 |

一般入学試験〈Ⅱ期〉

【一】次の文章は「昔話」について論じたものです。読んで後の間に答えなさい（本文は一部省略しています）。

はじめにひとつの質問をさせていただきます。

「昔話はどこにありますか」

この問いに対して、読者のみなさんはなにを思いうかべるでしょうか。昔話絵本に書いてある、あるいは昔話の再話本に書いてある、図書館に行けば本の形でならんでいる、というふうなことを思いうかべるかもしれせん。けれども、私のこれまでの昔話研究、および昔話調査の体験からすると、昔話がほんとうに存在するのは、それが語り手によって語られている時間のあいだだけなのです。ということは、語り終わると、昔話は消えてしまふものです。つまり、昔話は厳密に時間にとつた文芸であるということができません。

創作の文学も、そこに書かれている出来事は時間にとつて流れているし、それを読むには時間が必要ですから、ある程度は時間にとつた文芸であるといえるのですが、昔話のように耳で聞く文芸は、きわめて厳密に時間にとつた文芸なのです。それは音楽と似た性質をおびてきます。昔話は、時間にとつた文芸であるという点で音楽と非常に似た性質をもっています。

①私は、物語を楽しむには、耳で楽しむことがまず大切だと思っています。今日では、文学とか小説とか物語などといういろいろな言葉で表現されますが、くくつていえば、言葉による物語は、ほとんどの場合、それは本のように印刷された活字として受け取られています。(A)、人は物語は目で読むものだと思っています。(B)、考えてみれば人類にとつては、文字が発明されるはるか以前から言葉はあつたわけです。文字によって言葉が文章として書きつけられるようになったのは、人類の歴史からすればごくごく新しいことです。しかも、それが印刷されるようになったのはほんとうに新しいことなのですが、現在では物語といえはほとんど目で読んで受け取っているのです、人は目で読むものだと思ひこみがちです。

そこでふたたび冒頭の「昔話はどこにありますか」という問いにかえつてくるのですが、人類の歴史を考えると、いま述べたように、まず音としての(a)があり、それから(b)が発明され、それから(c)が発明されて今日の形にいたっている、ということは確かな事実です。

ひとりの個人の人生におきかえてみても、同じことがいえます。人間は生まれたとき、ウブゴ工しか発することはできません。(C)、周囲の人たちの言葉を耳で聞くことによつて、言葉を、カクトクしていきます。二歳、三歳のときにはもうすでに、かなりの言葉をつかつて親やきょうだいと話すことができます。けれども、まだ文字は知らないでしょう。文字を習うのは、また二、三年後のことです。つまり、ひとりの人間にとつても、まず音としての言葉があり、耳でそれを楽しみ、それからやつと文字を読み、文字を書くようになっていくわけです。ですから、人間にとつて耳で物語を聞くこと、楽しむことは、根本的に重要なことだと思ひます。その段階を抜きにして、いきなり文字で物語を楽しむことはできないのです。

そういう目で現在の日本の状況を見ると、耳で物語を楽しむという場面が少なすぎるように思ひます。文字を習うことが早ければ早いほどいいと信じられてるようにさえ思われます。しかし、文字を覚え、文字で物語を楽しむ前に、まず耳で物語を聞き、(D) 物語を楽しむ時間がなければならぬはずで、人類もそうやってきたし、ひとりの人間もそうやって成長してきたからです。この順序をくずすことはできないし、その順序は大切だと思ひます。

私はその意味で、昔話という耳で聞かれてきた文芸が、いま子どもたちの耳に音としてとどけられることが必要だと考えています。その意味で、耳で聞かれてきた文芸は本来どういふ姿をもつていたのか、具体的にいえば、^② どういう語りの法則をもつており、^③ どういう語り口で伝えられてきたのかということを確認することが必要だと思ひつて、この本を書くことにしました。

(E)、耳で聞く昔話とは時間的文芸であるということを先に述べました。時間的造形物であるという点では音楽と似ているということも述べました。音楽の場合には、その表現法に関する研究が進んでいます。とくに西洋音楽については、古くから作曲法、あるいは作曲技法というものが研究されてきました。そして、それはもうほとんど完成されているといつてもいいでしょう。モーツアルトの作曲技法はしかじかである、ロマン派の作曲技法はしかじかである、この点がモーツアルトとちがう、というふうなことが、西洋音楽の理論畑ではもうはつきりいわれていきます。

昔話についても、じつは同じなのです。ただそこには、モーツアルトやベートーベンのような(d) 作曲者がいないだけです。だから、昔話の語りの法則、表現法の法則についての研究は、^④ コンナンと思われていました。しかし、昔話を伝えてきた無数の語り手たちを全体としてとらえ、その表現された昔話全体を、^⑤ プンセキしてみ

ると、そこにある種の共通の法則があり、ある部分は音楽ときわめて近い性質をもっていることが明らかになってきました。

昔話は言葉で語られます。言葉も、それが音として語られるときには、一種のリズムをもつて語られます。その意味で、やはり音楽性を秘めているといえます。土地言葉ではその音楽性が、土地言葉独特の子音や母音の微妙な違い、音の長短、強弱によって美しく発揮されます。また日本語の共通語であっても、土地言葉とはすこしちがいがながらも、子音、母音の微妙な違い、音の長短、強弱によるリズムがあり、それが昔話のストーリーになって、私たちに聞く喜びをあたえてくれます。言葉で語られるかぎり、音楽的喜びもあたえてくれるのです。

(小澤俊夫「昔話の語法」)

問一 傍線部ア～エのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (A) から (E) に入る適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号は二回使用できないものとします。

ア そして イ やがて ウ つまり エ けれども オ ところで

問三 傍線部①「私は……大切だと思っています」とありますが、その理由について、本文中の語句をもとにして五十文字以内で説明しなさい。

問四 傍線部②「昔話はどこにありますか」という問い」とありますが、この答えを本文中の語句をもとに三十文字以内で書きなさい。

問五 (a) から (c) の中に入る語を本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問六 傍線部③「語りの法則」とありますが、筆者は研究者としてこれを明らかにするために具体的にどのようなことをしましたか。それがわかる一文の最初の五字を抜き出しなさい。

問七 (d) に入る最も適当な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 西洋の イ 特定の ウ 古典派の エ 懇意の

問八 次の1～4までの内容が本文の内容と合致する場合には○を、合致しない場合には×をつけなさい。

- 1 昔話は音楽と似た性質をもっており、昔話の研究は西洋音楽の作曲技法に関する研究に影響を与えた。
- 2 土地言葉であっても日本語の共通語であっても、昔話が語られる時には一種のリズムがあり、聞く人に音楽的な喜びを与える。
- 3 子どもは二、三歳のときにはまだ文字が読めないのに、昔話絵本は絵だけを見せて楽しませるとよい。
- 4 文字で物語を楽しむためにも、子どもにはできるだけ早く文字を習わせるとよい。

【二】次の文章を読んで後の間に答えなさい。(本文は一部省略しています)。

ウエスト夫人のキッチンの窓からは、スイカズラやアイビーが^アカラまる生け垣を通して、サリーの家のサンルームが見える。

サリーは真っ白の髪とブルーグレイの瞳が美しいアイリッシュで、長年パブリックスクールの数学の教師をしていたが、私が知り合った頃はすでに引退してアムネスティや反核運動などに忙しく走り回る毎日だった。文学にも^イ造詣が深く、二十年前の当時も私にアイルランドの作家や詩人の本をよく貸してくれては彼らのどういふところが素晴らしいか、夢見る瞳で^ウ滔々と述べるのだった。彼女を介して私はイエイツが好きになっていった。

そのように彼女は、多少アイルランド^ウ鼻^ビのところがあつたにしても、異人種(私のような)に対する差別意識はまったくといっていいほどなかった。だから、ウエスト夫人がナイジェリアからの来客のために部屋を貸してくれと頼んだときの彼女の反応は、決して人種偏見によるものではなかった。

そのナイジェリアン・ファミリィは、ウエスト夫人を頼って、町にある、Fスクールと呼ばれるパブリックスクールに子どもたちを通わせていた。そこは寄宿学校で、週末や祝日には生徒たちは保護者のもとへ帰る。ウエスト夫人の家はそのファミリィの英国での拠点のようになっていたのだ。

ウエスト夫人自身、このファミリィがいかに尊大でプライドがありすぎるか、しょっちゅう愚痴^ウを言っていたし、人の好意を当たり前^ウとしか受け取れず、人のもものは自分のもの、自分のものは自分のもの、という人たちのだ、と嘆くのだが、^ウ彼女の嘆きはどこか身内としてのそれのようでもあつた。

ナイジェリアンたちの武勇伝は後を絶たなかった。

その頃はその姉妹の三番目か四番目の、ローラという女の子がFスクールにいた。

私が入るすぐ前にも、ローラは下宿していた女の子に徹底してつらく当たった。例えば、——悪いわね、でもあなたの持っているカセットレコーダーを貸していただけじゃないかしら、と懇懇無礼に見下したようにいうので、その子はびつくりして思わずうなずいたが、考えてみればそのカセットレコーダーは部屋の外へ持ち出されたことがなかった。なぜ彼女がそれを持っていることがローラにわかったのか。

——彼女が留守の時に、部屋に入って家探したのよ。たまたま彼女はそのとき部屋をひどい状態で散らかしたまま外出していたの。ローラは二重の意味で、つまり、自分はそのひどい部屋の有様を見たわよ、という嫌みと、盗まなかったって彼女の持ち物ぐらいい自分が自由にできるんだ、という傲慢さを押し通すことで彼女に屈辱を与えようとしたのよ。

——でも、どうしてそこまで？

——彼女たちは白人が嫌いなものよ。彼女たちはスクールでも白人の友だちは一人もできなかった。連れてくるのは黒人の友人だけ。このあいだも長女のイヤビがオックスフォードから友だちを四人連れてきた。いつもの通り彼女らはリビングルームで彼女らだけの世界に入っていて、私はキッチンで彼女たちのために昼食をつくっていたの、そして急にイヤビはキッチンのドアを開けて、「これからケンブリッジに行くから車を出してちょうだい、今すぐ」って言うの。「でも、昼食を……」「今すぐよ」「でも、私の小さい車にどうやってあなた方五人のせていくの？」「行くのよ」結局、私のミニにはとても乗れきれないことがわかって、腹を立てて出ていってしまったわ。あの人たちは私のことを白人のメイドかナニーとしか思っていないのよ。建前では「イングリッシュマミー」と呼んでるけど。

——私は時々自分に言い聞かせるのよ。自分の国が（ウエスト夫人はもともと米国で生まれた）彼らの人種にしてきたひどいことの、これはツグナイのいつなんだってね。

もちろん、ウエスト夫人は彼らからお金をとろうなんて少しも思っていないし、彼らもまた、一銭だって払おうとしなかった。すべてはウエスト夫人の「古い知り合い」だから、という好意からだったのだが。

もともとサリーに限らず、ウエスト夫人の近所は揃って隣人愛にあふれた人が多く、家に客があふれてベッドが足りなくなつたときなど、誰かが喜んで自分の家の客間を提供するのだが、このナイジェリアンファミリーに限っては、みんなさつと顔色を変えて、——残念だけれどそれはできないわ、と短く言い放ち、大急ぎで話題を変えてしまうのだった。

イヤビやローラたちの母親、デイディはその頃ナイジェリアとイギリスを行き来するキャリアウーマンだったが、見た目もどっしりと、カンロクがあり、いつもナイジェリアの民族衣装に身を包み、頭の上には派手にデコレイティブされたターバンのような帽子を載せていた。

たまに母親が来ると、彼女たちは借りにきた□のようにおとなしくなり、おどおどと、母親の目の色をうかがつてろくにおしゃべりもしないほどだった。

デイディ自身、異国の地にいる娘たちに会いに来るといふより、自分の子会社で不正が行われていないか視察に来ている、といった雰囲気漂わせていた。

ローラが差し出した小遣い帳を調べるときのデイディの厳しい眼差し、何を言われるかと怖れているローラの上目遣いのびくびくした物腰は、私にはまったく新鮮だった。今の日本のどこに、こんな親子関係があるだろう。二十歳近い娘と母親との間に、こんな厳しい上下関係が存在するなんて。

とにかくデイディは威風凛々を払う、風情があった。その存在感は何に例えようもなかった。

あるときデイディはキッチンに座って書類に目を通していた。私には日本人の客があり、彼が持ってきた蕎麦を調理してそこで食べるようになっていた。ウエスト夫人のキッチンはそんなに広くない。普通なら、ちよつと場所を譲るなり、会話に加わるなりして周りとは友好的な空気を保とうとするものだが、デイディはまるで象のように悠々として、私たちが周りではたばたしても一向に意に介さずと言った風情、いよいよできあがった蕎麦を食べる段になって、彼が思い切りよく一気に蕎麦を嚙り込み——私は心中密かにこの事態を怖れていたのだが——、かつてデイディが生まれてこの方聞いたことのない音がした。さあ、この場をつなげるために私は何か言わねばならない。

——驚いたでしょう？ でも、これが伝統的な日本のヌードルの食べ方とされているの。
デイディは顔色一つ変えず即座に答えた。

——それが文化である限り、どんなことであろうと私はそれを尊重する。文化である限りは。

これを聞いた日本の知り合いは嬉々として「江戸っ子の蕎麦の食べ方」について蘊蓄を傾け始め、デイディは大真面目に頷きながら、聞き入った。

珍妙な光景であった。

(梨木香歩「春になったら莓を摘みに」)

問一 傍線部ア～オの、漢字には読みを付け、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「ウエスト夫人が……頼んだときの彼女の反応」とはどのようなものですか。具体的に説明した一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問三 傍線部②「彼女の嘆きは……でもあった」とありますが、その理由を本文中の言葉をもとにして三十字以内で答えなさい。

問四 傍線部③「白人が嫌い」とありますが、これを漢字四字で表現した語句を本文中から抜き出さなさい。

問五 傍線部④は「普段とちがっておとなしくしている様子」という意味のことわざです。最後の一字を漢字で答えて、ことわざを完成させなさい。

問六 傍線部⑤「何を言われるか……びくびくした物腰」とありますが、これと対照的なローラの態度が記された一文の最初の五字を抜き出さなさい。

問七 傍線部⑥の比喩の種類を漢字二字で答えなさい。

問八 この文章では、異なる人種・文化を背景に交流する人々の様子が描かれています。そこから異人種・異文化間のコミュニケーションを円滑にする要因を考察し、本文中の言葉をもとにして五十字以内で答えなさい。

【三】 次の文学史上の項目に該当する文学者名を後群から選び、記号で答えなさい。

1 三行書きの短歌 2 日本人初のノーベル文学賞受賞 3 自由律俳句の名手

4 口語詩の真の完成者 5 近代文芸評論の確立

(ア 萩原朔太郎 イ 種田山頭火 ウ 小林秀雄 エ 石川啄木 オ 川端康成)